

《書評》

『イスラーム・デジタル人文学』

須永恵美子*・熊倉和歌子**編、竹田敏之***ほか著、人文書院、2024年

澤 裕 章[†]

デジタル技術の進展が学術研究の方法論に変革をもたらすなか、イスラーム研究もまた例外ではない。膨大な写本資料、歴史的テキスト、音声・映像資料といった一次資料がデジタル化され、それらを分析する技術が急速に進展している。本書は、こうした変化の中で、デジタル人文学 (Digital Humanities, 以下 DH) の手法をイスラーム研究に応用することで、新たな研究の可能性を提示する野心的な試みである。DHには様々な定義が存在するが、本書では永崎 (2020) に従い「人文学にデジタル技術を応用することによって作り出される実践を含む多様な知を扱う分野」と定義する。

本書の書評としては、刊行直後に宮川 (2024) が全体を概観し、「イスラーム研究とデジタル人文学という、二つの学術分野の架橋を図る、画期的な書籍」と高く評している。一方で、移り変わりの激しいデジタル技術と密接に関わる DH では、日々新たなツールやアーカイブが生まれ、その価値は大きく変動しうる。本評では出版から約 1 年経った時点での最新情報と評者自身が取り組むデジタル人文学的研究を紹介しながら、本書を端緒とした DH 研究の協働の可能性を模索したい。

本書は以下の全 9 章で構成される。

第 1 章 イスラーム・デジタル人文学ことはじめ（須永恵美子）

第 2 章 デジタル化される聖典：クルアーンとハディースの音と文字（竹田敏之）

第 3 章 閉じられたテキストを世界に向けて広げる：デジタル人文学とイスラーム法学のテキスト研究（塩崎悠輝）

第 4 章 自動文字認識とテキスト化：Transkribus によるウルドゥー語の自動翻刻（須永恵美子）

第 5 章 計量テキスト分析：文字データを量的に解析する方法（山尾大）

第 6 章 TEI ガイドラインと OpenITI mARkdown：マークアップ手法を用いた歴史研究と分析（熊倉和歌子）

* 京都産業大学文化学部准教授

** 慶應義塾大学経済学部教授

*** 立命館大学立命館アジア・日本研究機構教授

† 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻博士後期課程

hsawa@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

第7章 ネットワークを可視化する：近世マグリブの伝記史料を題材に（篠田知曉）

第8章 五線譜のデジタル化：クルアーン第1章第2節を例に（石田友梨）

第9章 人工衛星で人間活動を測定する：夜間光画像を利用したラマダーンの分析（渡邊駿）

本書はイスラーム研究およびDHの世界に足を踏み入れようとする人々に向けて書かれており、入門書としてDHの概観を見渡せる構成を取っている。(1) 史資料を公開するアーカイブの構築、(2) テキストのデジタル化、(3) デジタルテキストの利活用、(4) テキスト以外の資料の分析という、DHの研究を行う過程で史資料が活用される際の大まかな順番に沿って章立てが組まれている。そのため、読者自身の理解度や関心に応じて読むべき項目が分かりやすい。

上記の主要な記事以外の内容も充実している。各章の終わりにはコラムが置かれ、各章の内容に関連した具体的な取り組みを知ることができる。さらに、巻末では、「イスラーム圏のデジタル資料を扱う研究プロジェクト・公文書館・デジタルアーカイブ」と題して、世界各地で進行中の研究プロジェクトの概要とURL、各サイトにリンクされたQRコードが示されており、スマートフォンなどで該当サイトにアクセスできるようになっている。

各章とコラムは、それ自体が研究の事例として示唆に富んでおり、研究テーマとして興味を引くものでありつつ、DHをいかにして自分の研究に取り込むかの手引として有用である。例えば、第4章および第6章から第8章は具体的なDHツールに言及している。これらのツールは多くが英語で解説されているため、デジタル技術に必ずしも精通していないイスラーム研究者にとっては専門用語も見慣れないものが多く、使用するまでのハードルが高い。しかし、本書ではその使用法が詳細に記されているだけでなく、実際に分析結果を示すまでの過程が示されている。したがって、読者もそれを参照しながら操作することで、ツールに対する理解を一層深めることが可能になる。DHでは「とにかく一度触ってみる」が重要な心構えであり、自ら手を動かしてツールに慣れ親しみ、DHの世界を体感してほしいという編者らの意図も伝わってくる。

そうして、DHへの好奇心をさらに満たそうとしたとき、他に参照できる書籍はないかと探すことがあるかもしれない。近年、イスラーム研究とDHを掛け合わせた研究は着実に数を増やしている一方で、それを中心に論じた書籍は必ずしも多くない。イスラーム研究とDHの関係を論じた嚆矢として、*The Digital Humanities and Islamic & Middle East Studies* (Muhanna, 2016) が挙げられる。同書も本書と同様に、DHと関連する分野を網羅的に論じている。そこでは教育学的な観点やプログラミング言語Pythonを使ったツールの構築など、本書では議論されていない分野にも触れられている一方で、ネットワーク分析や文字認識技術OCR/HTRには紙幅が割かれていな。したがって、本書と相互補完的に参照することで、DHという広大な分野を見渡せよう。イスラーム研究とDHという組み合わせを専門的に論じた書籍は、世界的にも実質的にこの2冊という状況であり、本書は世界的にも高く評価し得るだろう。

一方、本書が抱える課題として2点を挙げておく。一つは、書籍という媒体であるがゆえに、必ずしも最新情報にアクセスできるわけではないことには留意しておきたい。日進月歩で発展するデジタル技術に対して、書籍は情報の鮮度という観点では劣後する運命にある。本書の資料にあるアーカイブやデータベースもアップデートされたり、新たなものが公開されたりと最新の情報を確認する必要がある。例えば、本書資料には掲載されていないデータベースとしては、トルコ写本協会が提供するManuscripts Catalog and Image Databaseがあり、トルコ国内18の図書館と提携

して63万点を超える写本や稀覯本の画像とメタデータを公開し、数多くの写本を閲覧・購入することができる¹。他方で、サイトのURLが使用できなくなる、あるいは政情の変化によってサイト自体が閉鎖されるといった事態に陥ることもある。本書の資料で言えば、評者がトルコのマルマラ大学のアーカイブに2025年2月にアクセスしたところ、アーカイブが見当たらず、改めて検索したところ、サイトがリニューアルされ、別のURLが設定されていた²。

もう一つは、近年飛躍的に進展したAIに関する議論が十分にできていない点である。これは、本書の出版計画時点ではChatGPTすら公開されていなかったという背景に鑑みれば致し方ないとも言えるが、今後DHを語る上で、AIという観点は不可欠になるだろう。ここでは、その一例として、評者自身の研究に簡単に触れておきたい。評者は現在、AI技術の一つである機械学習を用いて翻訳者推定を行なっている。翻訳者推定とは、テキストには翻訳者の特徴があると想定し、機械学習によってその特徴を捉え、翻訳者を推定する自然言語処理タスクである。評者は、『アレクサンドリア集成』と呼ばれる6世紀から7世紀にアレクサンドリアで成立した医学カリキュラムの翻訳者推定を試みている。

さらに、その過程では、第1章や第3章で言及されたデジタルテキスト・データベースを基に学習のデータセットを作成したり、写本でのみ現存するテキストを第4章にあるHTRで文字起こしをしたり、というようにDHに絡む複数のツールを利用している。複数の方法論を組み合わせて新たな研究の切り口にできるのもDHの強みであると言えよう。

総じて、本書は構成・内容ともに入門書として優れしており、イスラーム研究に関わる人々にはぜひ手に取ってほしい一冊になっている。編者の須永は、DHの多様な知を活用し進める際の協働、例えば合同の勉強会や共同研究が重要な位置を占めることを指摘する(265頁)。イスラーム研究も、一口には全体を語ることができない多様な領域を含む分野であり、DHとの組み合わせは無限大とも言える。本書をきっかけにDHに関心を持った研究者らが協働し、イスラーム研究の裾野を開拓していく日を期待したい。

参考文献

- 永崎研宣(2020)「書籍をデジタルの視点で『デジタル・ヒューマニティーズ』とは」日本電子出版協会YouTubeチャンネル. <https://www.youtube.com/watch?v=cZKtJl6qPSg> (2025年3月3日閲覧).
- 宮川創(2024)「デジタル人文学がイスラーム研究にもたらす変革:『イスラーム・デジタル人文学』(須永恵美子・熊倉和歌子編、人文書院、2024年)」『人文情報学月報』153号. <https://www.dhii.jp/DHM/dhm153-1> (2025年3月13日閲覧).

Muhanna Elias, ed. 2016. *The Digital Humanities and Islamic & Middle East Studies*. Berlin and Boston: De Gruyter.

¹ <https://portal.yek.gov.tr/>

² <https://katalog.marmara.edu.tr/>